

もし海谷の最初の起原をその外部に於てすら眞正の河谷であることが出来るとすればそのために要する大陸隆起と沈降との大さは地表の物凄さ歪を示すであらう。我々はコロラド高原を隆起したそれに比較すべき變動や二三の海岸でなく世界の全部でなくとも大概の海岸に沿うて起つた變動を取扱ふことになるかも知れない。もしこの様な變動が惹起したのであるならば、生物の移動、氣候及び凡ての力學的作用に與へる効果は蓋し凄まじきものであつたに違ひない。

本篇はアメリカ地理學評論本年一月號所載のF・P・シエバー氏の Submarine Valleys を逐次譯したものである。

新著紹介

○天文年鑑

千九百三十三年、東亞天文協會編
恒星社發行 定價一圓二十錢

京都帝國大學内東亞天文協會の編輯で、山本博士の監修である、毎年かうした年鑑が出るのであるが、本年はポケット

形にして、叙事簡潔を旨とせられたので、手頃であり、見やすい、内容は、星座、太陽、月、遊星の運行、衛星の軌道、八大遊星の離隔圖、彗星、流星、恒星、重星、連星、星雲、星團、宇宙と其構造、地球、緯度の變化、ユリウス通日、天文時刻、我國の主なる天文臺等にわたつて明快なる解説と詳細な表が満載されてゐる、就中月の表は天文曆ともいふべく重寶なものである、予は天文に素人であるが、かうした便利な書を手にして、これから夜の空をいかにつかしんで、みるであらうかと歡喜に堪へない。(藤田)

○邦彩蠻華大寶鑑

昭和八年一月發行金二卷
一部金七十圓也

これは神戸野崎通の蒐集家池長孟氏の所藏せる南蠻交易に關係した地圖、版畫、屏風、油繪、人物繪圖、紅毛人圖、西洋風景、聖像、ギヤマン作品、カルタ、更紗、南蠻劍、土圭湯呑、皿等凡二百點を撰んでアートペイパーに色刷にした豪華版(菊倍大判)裝訂も立派なものである、著者の説明は常識であつて、學問的ではないが面白い、中に世界地圖屏風(方形プロゼクシオン)と、安土屏風(印形圖八枚折)がある、何れも地名がなく、さうして美はしい繪畫である。但し後者は慶長七年に出來た、利瑪竇の坤輿圖を真似た半球圖や天文圖があるから、勿論其製作は安土時代とはいへない、朝鮮半島及メガラニカの形から見ても寛永頃のものと想像する。地圖でなくて繪である點からとにかく珍らしいが確かな年代はわから

ない。次に方圖で、世界地圖萬國人物屏風、同じく日本地圖萬國人物圖屏風、萬國繪圖肉筆の三點いづれも珍らしい。立派な美本として推賞したい。(藤川)

雜報

○圖版第四版説明

第一信濃青木湖

聯珠形をなして安曇平の北端に連なる仁科三湖の北端を占める靈湖。日本の地質學が開かれた曉からその名地學者間に膾炙してゐる。最近小川名譽教授が中央日本に於ける氷河問題の端緒を得られたのもこの附近で、湖面北岸に低く左右に連なる丘陵は堆石丘であるとせられた。左の急斜面は仁科山脈の一部で、カールの地形がその頭部に存在する。遙か雲表に白馬岳の雄姿を仰ぎ、清澄幽邃の仙境である。

第二信濃松原湖畔榊山

千曲川の上流、南佐久郡松原湖西岸の榊山。圖版に見る如く金山すべて安山岩の大塊から成り、ベンクの所謂岩塊堆石らしい。記事は本誌本卷第三號の小川名譽教授報文に詳しい。岩塊の大きさは中央左よりの人物と比較せられたい。

第三信濃小縣郡武石村安山岩塊

武石村から北西へ入る谷の中には安山岩の大塊が轉々してゐる。附近は第三紀層の綠色凝灰岩のみから成つて初めは礫

の由來に付て甚だ面喰ふ。谷をさかのぼること山背に(ノダツバラ)岩山安の礫のみから成る地層に出會つて疑問は一先づ氷解するが、圖版に見える様な人身二倍大の大礫が如何なる營力で運搬し來られたか。小川名譽教授は之に氷河營力の説明を與へられた。因にこの安山岩はこの地點から約二十軒離れた美ヶ原の熔岩と同一である。

○除虫菊とアルジエンチン

アルジエンチンは農牧國にして下水工事不十分なるため、都市と雖も蠅多く郊外に近きは蚊其他の虫類多し、従つて一般に殺虫除虫劑の需要尠からず、野菜花卉其他の農作物又は牧羊等に使用する此種藥品の需要多し、従つて右の製劑の原料輸入多き由なるも、製造行程は嚴秘にして調査困難なり、しかし本邦産除虫菊の輸入は増加の傾向にて粉類は過去三年間の統計によれば約二十倍の躍進にて第二位の輸入高となつた。

除虫菊液及煉物輸入高

一九二八年	一七六、七〇五担	三三、二二三トン
一九二九年	一三九、〇〇〇	二七、七七五
一九三〇年	一四四、三三〇	二七、六五九
一九三一年	三〇六、三三三	三三、七〇五
同線香類		
一九二八年	一七、九三三	二六、六六三
一九二九年	六、六〇四	一〇、四六六
一九三〇年	五、九四〇	九、四四四